

淀城跡を歩く

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

淀城は、元和9年(1623)の伏見城廃城に伴い、京都護衛の拠点として徳川秀忠が松平定綱に命じて築かせた城です。宇治川・木津川・桂川の三川と、京街道が合流する要衝地につくられました。

歴代城主には譜代大名が任ぜられました。永井尚政が城主であった

寛永14～15年(1637～38)には木津川の付け替え工事をしない、城下の拡張がなされました。享保8年(1723)以降は稲葉家が城主を務めます。宝暦6年(1756)には天守が落雷により焼失、慶応4年(1868)には鳥羽・伏見の戦いで、城下の大半と城の一部が焼失しました。

明治4年(1871)の廃城以降は、石垣の解体や堀の埋め立てが行なわれました。現在、本丸・天守台は公園として整備され、城下町は当時の地割りがよく残っています。

今回は、発掘調査で見つかった遺構やゆかりの地を訪ねて、淀城跡を歩いてみましょう。(中谷俊哉)



北コース



淀小橋跡と淀小橋碑（南から）

城の北側を流れていた旧宇治川には、長さ 71 間(約 129.1m)の淀小橋が架かっていました。現在、京阪淀駅のロータリー西側には淀小橋碑が設置されています。淀小橋を渡って京街道を北に向かうと京都に着きました。



唐人雁木の古写真 大正 6 年 (1917) 以前

淀小橋を渡った先の城下町(納所町)には、船の渡し場がありました。朝鮮通信使もここを利用したことから「唐人雁木(とうじんがんぎ)」と呼ばれました。渡し場は現存しませんが、跡地に石碑が建てられています。



淀の水車跡碑（南東から）

城の西側を流れる桂川には、城内の庭園の池に水を取り込む目的で水車が設置されていました。桂川を行き交う船から見える水車は名所となり「淀の水車」として親しまれました。付近の発掘調査では、庭園の池跡とそこに水を引くための樋が見つかりました。



天守台と本丸石垣（北東から） 京都市所有写真

天守台には二条城から移築された天守が置かれていましたが、宝暦 6 年 (1756) の落雷で焼失しました。昭和 62 年 (1987) の発掘調査では、この落雷に伴うとみられる火災痕跡を確認しています。

南コース



東曲輪の米蔵跡（東から）

東曲輪は本丸の東側に位置し、東には京街道が接していました。厩や上級武士の屋敷など重要な施設が置かれました。東曲輪北端の発掘調査では、桁行 20 間(約 36.4m)にもなる淀藩の巨大な米蔵跡が見つかりました。



東曲輪の家老屋敷跡（西から）

米蔵跡の南側の発掘調査では、家老屋敷跡が見つかり、藩主や貴賓を迎える施設(式台・玄關・書院)が確認されました。また屋敷跡には、慶応 4 年 (1868) の鳥羽・伏見の戦いに伴うとみられる火災痕跡が確認されました。



京街道沿いの城下町（南から）

城の東側を縦断する京街道沿いには城下町(池上町・下津町・新町)が広がっていました。このあたりは鳥羽・伏見の戦いでほぼ全域が罹災しますが、明治時代の早い段階で復興を遂げます。現在でも、京街道沿いに間口を開いて建ち並ぶ町家が見られ、当時の面影がよく残っています。



孫橋からみた桜並木（東から）

現在の孫橋が架かる水路沿いは「淀の河津桜」として桜の名所になっています。孫橋を渡ると、その先の木津川にはかつて長さ 137 間(約 249.1m)の淀大橋が架かっており、京街道を南に向かうと大坂に着きました。